

# 『太玄』の構造的把握

川原秀城

本稿で明らかにしようとすることは、『太玄』の經學史のあるいは易學史的把握ではない。<sup>(1)</sup>『太玄』の根底にある太玄曆を明白化すること、及び太玄曆を利用した『太玄』の構造そのものの研究である。あくまで曆という側面を根底に据えた文化史的考察の一環であることを断わっておく。

## 第一節 太玄曆の構造

『太玄』の構造を理解するためには、その根底にある曆構造を理解することが必須条件となる。『揚雄傳』に引く『自序』に、「其の用いるや天元より一晝一夜、陰陽數度、律曆の紀を推し、九九もって大いに運らし、天と終始す。故に玄に三方、九州、二十七部、八十一家、二百四十三表、七百二十九贅あり。分ちて三卷と爲し、一二三と曰う。泰初曆と相い應じ、亦た顛頊の曆有り」と言い、『太玄』を太初曆と結びつけているからである。

1

先ず基本的な面から考察を始める。『太玄』には八十一の『易』卦に相當する首がある。それは一二三(『易』の二陽)二(陰)に當り、一二三という)が、四重の位(『易』の六爻に當り、下より家部州方と

『太玄』の構造的把握

いう)をめぐることによって、☱(中)☱(周)☱(礦)☱(閑)……  
☱(養)なる八十一首を生じるといふ構造を持つ。まさに『自序』「而して大いに潭く渾天を思い、參擧して四分すれば、八十一に極まれり」である。しかも『玄圖』「一玄都て三方を覆い、方、九州を同にし、庶部を枝載し、群家を分正す」といった、一玄↓三方↓九州↓二十七部↓八十一家なる序列關係までも含む。

『太玄』は、この種の系列と、別の系列とを持つ。『玄圖』「玄に二道有り。一は三を以て起り、一は三を以て生ず。三を以て起るは、方州部家なり。三を以て生ずるは、陽氣を參分し、以て三重と爲り、九營たるに極まるなり。是れ同本離生たりて、天地の經なり」八十一首の系列に對して、下(始)、中、上(終)を各首に考え、下下、下中、下上……上上の九營の位をつくる。そしてこの各位を贊と呼び、下より初一、次二、次三……上九と名付ける。

この二種の系列が異質なものであるのは、各首に一個の首辭と、各贊に一個の贊辭とを比較してもわかる。首辭の方は☱(斷29)「陽氣内に強く外に剛し。動けば能く斷決有り」のようにすべて陰陽の消息を述べる記載であるのに對し、贊辭の方は斷初一「君子は」心に斷じ斧を滅す。(小人は)其の繩矩に冥し」、斷次五「大腹(君主)其

の股(＝臣下)の脱を決す。君子に斷有れば、小人以て活く」のように、法律や政治などの事象に觸れ、「利」「貞」「冥」「休」などの吉凶判断のテクニカル・タームを用いる具象的記述である。

そしてこの二種の異なる系列を緊密に結びつけるのが、曆構造である。第一の方州部家八十一首の系列は、陰陽消息を説くのだから律曆と結びつくのは當然である。これに對し贊の方は、贊數が $81 \times 9 = 729$ であることよつて曆と結びつく。つまり『玄圖』「泰中の數三十有六策、以て七百二十九贊を律す。凡そ二萬六千二百四十四策、太積爲り $(36 \times 729 = 26244)$ 。七十二策を一日と爲す。凡そ三百六十四日有半 $(26244 \div 72 = 364\frac{1}{2})$ 。踏ここに満ちて以て歳の日に合し、律曆行なわる」のように、一贊を $36\frac{1}{2} = 72 \div 2$ 日に當て、七百二十九贊を $364\frac{1}{2}$ 日に當てる。この數は一年の日數に近い。だからさらに踏贊、贏贊の二贊を増し、數值的にも曆として完備させる。第二の系列もこのように曆と結びつく。

つまり第一の系列は、一年における陰陽消息という天の理念を説明するものとして、第二の系列は、數值的に天の運動を説明するものとして、ともに曆構造のもとに緊密に結合されるのである。

2

しかるに後世はこの踏贊と踏贊との理解を誤つた。司馬光『太玄集注』「踏は不足なり。其の不足なる者半日は贏贊」「贏は餘有るなり。四分日の一を贏贊と爲す」のように、晉の范望を始めほとんど全部の注釋家は、四分曆により $1年 = 365\frac{1}{4}日 = 364\frac{1}{2}(729贊) + \frac{1}{2}(踏贊) + \frac{1}{4}(贏贊)$ と考へる。ところが『自序』「泰初曆と相い應ず」「『玄圖』「故に子より辰に至る。辰より申に至る。申より子に至る。こ

れに冠するに甲を以てすれば、章會統元、月蝕と俱に没く。玄の道なり」によれば、 $1年 = 365\frac{385}{1539}日(1日 = 81\frac{43}{81})$ なる八十一分曆(太初曆・三統曆の定數より見た呼び名)とせざるを得ない。八十一分曆とは何か。一章を十九年、一統を八十一章、一五三九年となす曆である。そして十九年七閏法(十九年に七回の閏月を設ける曆法)のもとは、 $19世 = 19 \times 12 + 7 = 235月$ となる。ここで一章を考へてみよう。

$$1年の日數 \quad 1月の日數 \quad 19年の日數$$

$$19 \times (365\frac{385}{1539}) = 235 \times (29\frac{43}{81}) = 6939\frac{61}{81}日$$

一章十九年たつと、太陽の基準である冬至と太陰の基準である朔とが一致する。だが日の端數 $61\frac{81}{81}$ を見れば、上元の十一月朔旦冬至と時刻にずれが生ずること明白である。しかし一統一五三九年(＝ $19 \times 81$ )たつと、日の端數が消え、時刻に關しても、上元と一致する。つまり十一月朔旦冬至に戻るわけである。この時の日數すなわち $562120日 = 8 \times 868 + 8( = 1539世)$ では、干支において四十移動する。したがつて上元が甲子だったら、甲子↓甲辰↓甲申↓甲子……となり、『玄圖』の記述と一致し、三統曆を載せる『漢書』律曆志上「故に曆數の三統、天(統)は甲子を以てし、地(統)は甲辰を以てし、人(統)は甲申を以てす」とも完全に一致する。それ故太玄曆は八十一分曆なる太初曆に基づいたものであることがわかる。

しからば、 $1年 = 365\frac{385}{1539}日 = 364\frac{1}{2}(729贊) + \frac{1}{2}(踏贊) + \frac{385}{1539}(贏)$ としてよいか。否である。蘇洵が『太玄論』で揚雄を譏つて、七百二十九贊と踏贊贏贊で七百三十一贊有るならば、三百六十五二分の日とすべきであり、三百六十五四分の日とすべきでないというの

も、まさにその點である。<sup>(8)</sup> 兩贊一日の例つまり一贊を晝に當て一贊を夜に當て二贊で一日とする原則を守らねばならぬためである。なぜなら、もし一年の長さに  $\frac{1}{4}$  日あるいは  $\frac{385}{1539}$  日といった端數を設け、それを贏贊に對應させ一年を數值的に完全に終らせるならば、常に冬至の時刻より中首初一を考へることが必要となり、そしてある年には冬至は眞晝頃に始まるから、中首初一は晝に對應するのではなく、眞晝頃に始まり眞夜中頃に終ることとなる。したがって『玄數』「晝夜を以て、其の休咎を別つ」という兩贊一日の大原則と矛盾するからである。

すでに(一)『一年の長さは  $365\frac{385}{1539}$  日としなければならない』、(二)「兩贊一日の例は絶対に守らなければならない」という曆制作の原則はわかつた。さらに(三)「冬至は七百二十九贊の最初の贊中首初一に對應しなければならぬ」という原則がある。『自序』「其の用いるや天元より一晝一夜、陰陽數度、律曆の紀を推し、九九もつて大いに運らし、天と終始す」、太玄は天元たる冬至より、晝夜陰陽律曆の數を推し、天と對應して運る。『玄圖』「九營周流して、終始貞しきなり。十一月に始まり十月に終る」、七百二十九贊は十一月に始まり十月に終る。そして終ればまた始まり狂うことがない。これらの引用より、冬至が『太玄』の開始點であることが理解できる。そして七百二十九贊の開始點である中首初一は何如といへば、「初一。昆侖旁薄にして幽む」「測に曰く。昆侖旁薄とは、貞しきを思ふなり」、天は混論として地を包み、常に狂うことなく一日に一度めぐる。地は彭魄として中に居る。しかるに太陽は地下に隠れて現われない(范望の注)。とにかく『思』を下始に對應させ、『貞』で天太陽の循環を暗示し、『幽』で

黄宮を示すことによつて、冬至を抽象的に陽氣が始めて黄宮に萌す時つまり天始として説明するのである。まさに『自序』『玄圖』の引用とも合致する。そして『自序』「泰初曆と相い應ず。また顛項の曆有り」とも合致する。というのは、顛項は北帝で子に相當する。子は斗建を考へると冬至を含む十一月に對應する。それ故右の文は「太玄は太初曆に應じ、十一月冬至を一年の開始月とする顛項曆とも一致する」といった意味になるであらう。<sup>(4)</sup>

ほかに數式的表現ではつきりと中首初一を冬至に相當させる個所がある。『玄數』「玄姓、太始を去るの策數を置く。一を減じこれを九(倍)する。贊を増す。玄を去るの數なり。これを半すれば、則ち贊の冬至を去るの日數を得ん。偶は得る所の日の夜爲り。奇は明らむる所の日の晝爲るなり」。例をあげて説明しよう。聚首次三の「冬至を去るの日數」を求めてみる。中首を一とすれば聚首は第五十九番目の首である。五十八番目の翕首上九までの贊數を求めるとは、 $(59-1) \times 9 = 522$ とすればよい。聚首の次三であるから三を増す  $522+3=525$ 。これはこの贊が中首初一を一とした時、第何番目に當るかの數であり、「玄を去るの數」という。これを二分の一すると  $525 \div 2 = 262\frac{1}{2}$ 。つまりこの贊は中首初一を去ること  $262\frac{1}{2}$  日である。そして「冬至を去るの日數」に當るといふ。中首初一を一として、第何番目の贊に當るかを求めた數が、「冬至を去るの日數」の二倍であり、「玄(冬至)を去るの數」「玄攤」「冬至は玄に近きの象なり」であるとすると、すなわち中首初一至冬至を配當しているのである。

以上で、太玄曆の三原則が明確となった。  
 (一)一年の長さを  $365\frac{385}{1539} = 365\frac{250163}{1539}$  日とする。(二)兩贊で一日をあ

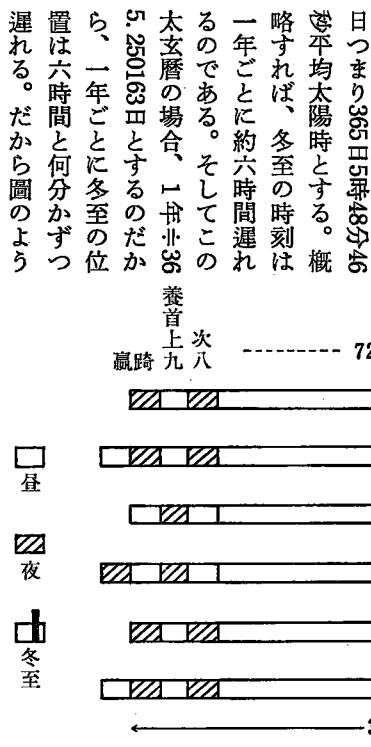
らわす。ただし一贊を晝、一贊を夜に當てるものとする。(㊦)冬至を中首の初一に配當する。

原則がしっかりしていれば、結果は簡單である。そしてこれら三原則を滿たして七百二十九贊と踏贊贏贊とを一年に對應させる方法は、

曆制作時の閏月の位置及び長さの決定計算に類似する。つまり一年の長さを365日としたり、365<sup>1</sup>/<sub>2</sub>日としたりして、冬至が

中首初一にくるように調整するのである。今日の天文學では一回歸年つまり太陽が春分點から出發して春分點に歸ってくる間は、365.24220平均太陽日つまり365日5時48分46

秒平均太陽時とする。概略すれば、冬至の時刻は一年ごとに約六時間遅れるのである。そしてこの太玄曆の場合、一冊非88.5.260163日とするのだから、一年ごとに冬至の位置は六時間と何分かずつ遅れる。だから圖のよう



に一年目が且に冬至がこようと、三年目には夜に冬至とならざるを得ない。そしてもし二年目を365<sup>1</sup>/<sub>2</sub>日としないならば、冬至は中首次に移動し、原則(㊦)と矛盾する。このような理由で、三年目の中首初一は夜に相當される。この方法で、一統一五三九年つまり五六二二〇日たつと、

$$770 \times (365 \frac{1}{2}) + 769 \times (365) = 562120$$

の式のように、七百七十回の一年三百六十五日半と七百六十九回の一年三百六十五日を経て、もとの一年目の状態つまり且冬至に復するのである。これが『太玄』だけに存する特殊な曆構造である。

ただし本来このような曆法を使用するのだから、『太玄』を使用し占筮を行なおうとする場合、その年の冬至の時刻を知ることによつて、その晝夜に合せ中首初一の晝夜を決定し占筮を行なわなければならぬはずである。ところがこのように嚴格に太玄曆を使用すれば、場合場合によつての使い分けが繁雜となり、しかも同一贊に、吉凶の分れ目である晝夜を決定できなくなる。したがって占斷に必要な贊辭を表現できない。それ故中首初一至冬至の晝を配當する場合つまり理想状態で、贊の晝夜を考え、冬至から數えた偶數の贊を夜に、奇數の贊を晝に對應させ、贊辭を構成するのである。

3 以上をまとめると、太玄曆は、(一)太初曆に、(二)兩贊一日の例と、(三)冬至開始とを組み合わせて作られ、同時にその曆構造は八十一首と七百二十九贊とを結合させるものとして存在していることになる。

そして太玄曆の(㊦)「冬至開始」の原則は、八十一首の陰陽消息の世界觀に由來するのである。『玄衝』には「中(一)は則ち陽の始なり」「應(41)は則ち陰生ず」あるいは「周(2)は徳に復す」「迎(42)は刑

を逆う、「贖(3)は威いを大いにす」「遇(43)は願いを小さくす」のような記載がある。これは、八十一首で、常に第々番目の首と第々十番目の首とが、プラスマイナス相反する衝(對照)の關係つまり陰陽消息の關係にあることを示している。そして陰陽消息の世界観は、陽氣が萌す時期を始點と考えるものであるから、冬至を開始點とする。だから八十一首は冬至の記載より始まる。中首「陽氣黃宮に潛み萌す。中に在らざるなし」。このように八十一首は陰陽消息説を踏まえているから、八十一首と九で結びつけられた七百二十九贊も冬至開始とせざるを得ない。すなわち冬至開始の原則は、八十一首の陰陽消息説によるのである。

また太玄曆の(一)「兩贊一日」の原則は、まったく七百二十九贊の占卜の必要性から生じてくる。「玄攤」は日月往來、一寒一暑あり。律は則ち物を成し、曆は則ち時を編む。律曆、道を交え、聖人以て謀る。晝以てこれを好しとし、夜以てこれを醜しとす。一晝一夜、陰陽、索を分かち、夜の道は陰を極め、晝の道は陽を極む。牝牡、群れ貞し、以て吉凶を攤る。聖人は、日月の運行を見て、律曆を總合的に治め歳事を計畫實行する。また晝夜が陰陽の道を別けることを見て、吉凶の事を伸展する。つまり曆夜そのものが陰陽の極であるから、それをおしひろめて吉凶休咎の占卜を行なう。「玄敷」「晝夜を以て其の休咎を別かつ」、「玄瑩」「晝は人の禍少なし。夜は人の禍多し」とするのである。それならば、占卜の中心は晝夜の決定にある。そしてそのことを七百二十九贊ではっきり表現するのが、兩贊一日の原則なのである。

このように考えてみると、太玄(曆)の構造は、(一)太初曆、(二)七百二十九贊の晝夜を基準とした占卜、(三)八十一首の陰陽消息の世界観によ

#### 『太玄』の構造的把握

って生じてきたと整理できる。また逆に言えば、その『太玄』(曆)の構造のため、占筮と陰陽消息の世界観という異質の系列が結びつくことができたのである。

#### 第二節 八十一首の陰陽消息説

『太玄』成立の三本柱の一つが、八十一首の陰陽消息説である。しかも八十一首は、二二二によって玄↓三方↓九州↓二十七部↓八十一家と三進法的秩序で構成されている。

#### 1

次にこの三進法の意味を分析しなければならない。先ず「玄」の考察より始めよう。「玄攤」「玄は萬類を幽かに攤べて、形を見ざる者なり。虚無を資り陶ねて、規を生じ、神明に鬪いて幕を定む。古今を通して類を開き、陰陽を攤べ措いて氣を發す。一たび判れ一たび合して、天地備わる。天日廻り行きて剛柔接わる。其の所に還り復して、終始定まる。一たび生き一たび死して、性命瑩かなり」、玄は幽冥深遠である故に、萬物を伸展する。玄は空虚無形の本體を取り養い、天圓を創造し、天地神明の道により、二二二の三敷を定め、古今の事象に通じ、類型的把握の贊の九位を開き、陰陽の道を伸展して、休咎を定め、陰陽二氣を交錯して、天地を備える。こうして天、日は運行し、晝夜剛柔の道は成立する。そして天體運行の循環性により、一年の終始は正しく定まり、月の満缺により、生死の道は明らかになる。このように「玄」は、「虚無」を養い、「三幕」、「九敷」そして天地を創造する。つまり「玄」とは、自然界の最高原理なのである。

聖人は、この原理を観察する。「仰げば以て象を觀、俯せば以て情を視、性を察し命を知り、始めを原ねて終りを見る。三儀、科を共に

し、厚薄相い劇るなり、聖人は天の形象、地の情性を觀察し、性命と終始とを考え、こうして天地人の三儀が、法を同じくし、かつ陰陽二氣の交錯消長によって萬物が生じることを知る。すなわちこの最高原理には、天地人三種の位相が存在することを知るのである。そして「法言」五百「聖人以て天地に擬え、身に參する有るか」、「玄統」是を以て昔の群聖人の事を作すや、上、天に擬え、下、地に擬え、中、人に擬う」のように、聖人は、天地人という法をとにもする三儀に則つて、法則を立てることになる。つまりこの三種の位相を持つ原理は、そのまま行動立事の規範ともなるのである。ここに至つて、「玄」と結びついた「天」「地」「人」の大原則が立つ。

しかも「天」「地」「人」は「玄」本體に内在するものとして、「天」は一に、「地」は二に、「人」は三に象られ、八十一首の基本形「三」に結びつけられる。「玄告」「玄は神象二を生じ、神象二は規(圓)を生ず。規は三幕を生じ、三幕は九據を生ず。玄、一幕にして天を得、故にこれを天有りと謂う。再幕にして地を得、故にこれを地有りと謂う。三幕にして人を得、故にこれを人有りと謂う。玄↓神象二↓規↓三幕(二)なる成立序位は、もとより『易』「易に太極有り。是れ兩儀を生ず」、「老子」「道、一を生じ、一、二を生ず。二、三を生じ、三、萬物を生ず」、「周髀算經」「圓(三)、方(二)に出ず」に依據する。そして「玄」が「天」(一幕)と「地」(再幕)と「人」(三幕)とに發達して行くことから逆に、「玄」本體の中にもともと「天」の要素、「地」の要素、「人」の要素が内在したと主張するのである。そこから次のように言う。「玄告」「玄は神の魁なり。天は見えざるを以て玄と爲し、地は形れざるを以て玄と爲し、人は心腹を以て玄と爲す」、神妙なる働きは、「天」では不見として、「地」では

不形として、「人」では心腹として、「玄」の中に藏されている。

そして「玄」は幽冥深遠であるが故に、萬物を伸展できるのである。「玄告」「天、西北に輿れて、精を化すを鬱ぎ、地、黄泉に輿れて、魄の榮えるを隠し、人、思慮に輿れて、至精を含む。天、穹隆として下に周ねく、地、旁薄として上に向い、人、葛蔓として中に處る。天、渾として擲る、故に其の運るや已まず。地、隕として靜か、故に其の生遅れず。人、天地に馴う、故に其の施行窮まらず」。斗建で西北に當る十月、陽氣は鬱として黄泉にあり、萬物の精氣は變化せず、天地はただ靜かに隕らかにその徳を養っている。それ故一旦動き出すや、萬物を成長させること無限である。だからこの時を玄に當てる。人も、天地に於ける玄のように無形でありながら至精なる思慮を内包するが故に、天地に從つてその行動も無限である。

以上整理してみても、八十一首の四重に於て三進法的生成秩序を持つ理由がわかる。幽冥深遠な「玄」が、萬物を生成伸展させる場合、あるいは逆に萬物不齊の數を取合連続させる場合、「玄」に内在する三種の位相つまり「天」(一)「地」(二)「人」(三)の結合展開によって作爲されるからである。まさに「玄圖」「夫れ玄なるは、天道なり地道なり人道なり。三道を兼ねて天(玄)もてこれに名づく」である。

ここに於て、(一)「玄」の三種の位相「天」「地」「人」は、各々價値を等しくし、並列的に存在していること、しかも(二)三種位相の理念的結合のしかたは、「人」が「天」「地」に、最終的には「天」に従うという方法であること、の二點に注意しなければならない。

先ず第一點より考察を始めよう。先に引用した「玄統」「三儀、科を同にし、厚薄相い劇るなり」に明確に顯れているように、「天」「地」

「人」は全く並列なものとして存在する。このことは何を意味するの  
か。『太玄』「嘿して之を兼ねる者は玄なり。擇いて之を散ずる者は人  
なり。其の門を稽ぎ、其の戸を開き、其の鍵を叩き、然る後に乃ち應  
ず。況んや其の否らざる者をや」、「玄」は黙って天地の道を兼ねてい  
る。ところが「玄」を理解しない者がいる。それは自ら求めないから  
である。『太玄』「其上や天に懸り、下や淵に淪む。織さきや歳に  
入り、廣がるや影を包む。其の道、冥に遊び盈ちたるを抱う。存を存  
とし亡を亡とし、微を微とし章を章とし、始を始とし終を終とす。玄  
に近ずけば玄また之に近ずき、玄に遠ざかれば玄また之を遠ざく。譬  
うるに天、蒼蒼然として東面に南面に西面に北面に在り、仰げば在ら  
ざる無し、其の俛すに及んでは則ち則ち見えざるが若し。天豈に人を  
去らんや、人自ら去るなり」。「玄」は、無限大ともなり、無限小とも  
なり、存在しない所はない。また成就するを好まず、物事が萌さない  
幽冥を好み、相手のあるがままに従い、相手に働きかけることなどな  
い。このように「無爲」を徳目とする「玄」であればこそ、それを認  
識する側すなわち「人」の重要性が増してくる。つまり捉える側の態  
度が大きく物を言ってくるのである。『法言』君子「或る人曰く。聖  
人の道、天の若し。天は則ち常有り。奚んぞ聖人の變ずること多き  
や。曰く。聖人固より變ずること多し。子游、子夏、其の書を得る  
も、未だ其の書する所以を得ず。宰我、子貢、其の言を得るも、未だ  
其の言する所以を得ず。顔淵、閔子騫、其の行を得るも、未だ其の行  
する所以を得ず。聖人の書、言、行は、天なり。天其れ變ずること少  
なからんや」。このように捉える側によって、自然界の最高原則であ  
り不變なる玄の道ですら、大きく變ずるのである。

『太玄』の構造的把握

人によって始めて明らかにされるものであるから、『玄告』「(故に)善  
く天地を言う者は人事を以てし、善く人事を言う者は天地を以てす」  
のように、「人」の價値は「天」「地」と並ばざるを得ないのである。  
では、人のとるべき、道を捉える基本的姿勢とは何であろうか。『法  
言』君子「天地人に通ずるを儒と曰う。天地に通じて人に通ぜざるを  
伎と曰う」、『法言』五百「或るひと問う。聖人、天を占うか。曰く。  
天地を占う。(曰く)。此くの若ければ史なり。何んぞ異ならん。曰  
く。史は天を以て人を占い、聖人は人を以て天を占う」、すなわち人  
のとるべき態度とは、「人」を重要視する聖人の道つまり儒教だっ  
た。それ故『自序』で「道德仁義禮智に擬えて『太玄』を作った。そ  
して要は五經の道合する」と言い、『法言』問神では『太玄』を作っ  
た理由を問われ、「仁義のためなり。しかも雜駁ならざるを心掛けて」  
と答える。まさに『法言』問神「書、經ならざれば書に非ず。言、經  
ならざれば言に非ず。言書、經ならざれば多多贅なり」の態度と一致  
する。

八十一首の、「天」「地」「人」が並列である三進法的生成秩序の意  
味は、さらに明白になった。儒教の持つ、仁義禮といった人倫の重要  
視を明らかにするためである。すなわち、五經に代表される儒教道德  
に合致する態度で、天地に則るべきことを示すため、原理的に「人」  
は「天」「地」と併存し價值的にも等しいとして、根本原理「玄」に  
「天」「地」「人」なる三種の位相を設け、しかも三倍三倍と展開させ  
ることで萬物の創造過程を象徴したのである(挿圖参照)。三にはこの  
ような意味があった。

次に第二の問題點「天に則る」の意味について考てみよう。桓譚は  
『新論』の中で『太玄』に言及し、「根本原理『玄』とは、天であり

道である」と述べているが、それは『玄圃』「夫れ玄なるは天道なり地道なり人道なり。三道を兼ねて、天もて之に名づく」の、「天」「地」「人」を兼ね合わせた最高原理は、天を意味する「玄」によって名付けられた、という記載に一致する。これは暗に「天に順う」ことが『太玄』の中心命題であることを示す。さらに八十一首の首辭が陰陽消息説で構成されており、かつ『太玄』が天を説明する太玄曆を根本に据えていることは、「天に順う」ことが『太玄』の中心命題であることを一層明らかにする。逆に言えば、「天に順う」ことが中心命題である故に、八十一首で説き、しかも七百二十九贊を太初曆に對應させる。そして『自序』に「大いに渾天を思い、『太玄』を作った」というのもこの意味であらう。

次に首辭を見てみよう。「首は天の性なり」(『玄樞』)。八十一首の代表として二至二分二啓二閉を示す首を擧げる。

(一) 中(一)「陽氣、黄宮に潛み萌す。信、中に在らざる無し」冬至の節。陽氣は地中に潛みつつ、萌え出ようとする。信びようとする力が内に充滿している。

(二) 差(11)「陽氣、東に蠢ぎ闢く。帝、群雍に由る。物その容を差す」立春の節。天帝は群生をやわらぎやすらかにする。萌え出た萬物は千差萬別の形状を呈する。

(三) 釋(21)「陽氣和し震ぎ、圓く煦く物を釋く。威な其の枯を稅き、其の甲を解く」春分の節。氷は解け、堅い蕾・穀もはじける。

(四) 裝(31)「陽氣大いに事を用うと雖も、微陰、下を據め、裝じて去らんと欲す」立夏の節。微陰がまさに上ろうとするので、陽氣は旅立の用意をして消え去ろうとする。

(五) 應(41)「陽氣、上に極まり、陰の信、下に萌す。上下相い應

ず」夏至の節。上での陽の消滅と、下での陰の發生と相い應ずる。(六) 常(51)「陰以て臣を知り、陽以て辟を知る。君臣の道、萬世易らず」立秋の節。秋が夏を承けるのは、臣が君を承けることの象徴。

(七) 飾(61)「陰は白、陽は黒、其の職を分け行なう。出入、飾有り」秋分の節。陰氣は西(白)を治め、陽氣は北(黒)に退く。これが陰陽の分職。そして白と黒との絡み合いが飾りをなす。

(八) 止(71)「陰大いに物を上より止め、陽また物を下より止む。下上俱に止まる」立冬の節。陰陽二氣は隔絶される。

(九) (十)は「陽氣」で記載が始まり、(六) (七)は「陰」で始まるように、八十一首では一〇四十一は「陽」で、四十二〜八十一は「陰」で始まる。そして辭そのものが陰陽消息と季節の特徵を端的に示している。

では「時」として現象する「天」に順うことが中心命題となつたのは、如何なる理由によるか。『玄瑩』「天地は開闢し、宇宙は拓く垣らかなり。天元より咫尺し、日月は數を紀す。曆紀を周渾り、群倫は品庶たり。(中略)故に曰く。假いなるかな天地、啓化を啗み函れること、玄より裕きは函し」天地開闢より以來、日月は運行巡還し、萬物は衆多となる。そして「玄」は、萬物啓化の道を内包すること一番である。天地の萬物啓化の道、これこそが天に順わねばならぬ理由なのである。萬物の繁榮、季節季節の政の適正、すべて天地現象の中心たる「時」に順わねばならない。「萬物の紛錯たるは、則ちこれを天に懸く」(『法言』吾子)。「八十一首、歲事成な貞し」(『玄首都序』)

以上の如く、「天に順う」とは、萬事、天の陰陽消息で現象する「時」に順うことだった。そしてこの天時に順うことから、曆に對應させる



態度が生じてくる。つまり當時最も正確に天の運行を記すのは、八十一分曆である太初曆であった。それ故揚雄はこの太初曆に従う。しかも太初曆は、陰陽消息と結びつく候氣の基準、十二律呂の一・黄鐘の容量より、定數八十一を導き出したものであるから、いっそう従いやすかった。そして陰陽消息は、八十一と結びつくものであるという幻想を抱かせるのにも充分であった。それ故陰陽消息を説くには、(陽) (陰) を使用した六十四卦の方が自然ですらあるのに、ことさら三進法的秩序の八十一首を使用したのである。

この節を終るに當って、八十一首の意義を整理してみる。自然界の最高原理「玄」は、幽冥深遠であり、無爲を以て性格とし、「天」「地」「人」の三位相を内在させている。そして「人」は、「天」「地」と價值的に並列し、しかも「天」「地」の道に従うものである。したがって、「人」は「天」「地」と並列する故に、八十一首は三進法的生成秩序を持ち、また「天」「地」の道に従う故に、首辭は陰陽消息で季節を記すことになる。しかも「人」が「天」「地」と並列されるのは、五經の示す、人倫の重大視を明らかにするためであり、また首辭が陰陽で表現されるのは、『太玄』の中心命題は「天時に順う」ことであると明示したいがためである。

### 第三節 七百二十九贊の太玄占

『太玄』の三本柱の一つが、七百二十九贊の晝夜を基準とした占筮である。しかも七百二十九贊は、八十一首の「天」「地」「人」による三進法的秩序とは異質の、下、中、上つまりは下下、下中……上上の九品によって、八十一首より派生したものである。これは明白に八十

『太玄』の構造的把握

一首と思想を異にする。

1

次にこの七百二十九贊の思想を分析しなければならぬ。先ず七百二十九贊と八十一首の關係より始めよう。中首の九贊だけは、『易』文言傳のように、『玄文』に於て意味を補足するから、これを利用して首と贊との關係を考えてみる。

III 中の首辭「陽氣、黄宮に潛み萌し、信、中に在らざる無し」、陽氣あるいは萬物の伸びんとする力が、中に充實している。それ故この首を中と名付ける。

中首のそしてこの「中」という概念の示す範疇に於て、九贊は自らを機能させる。

「初一。昆侖旁薄にして幽む」「測に曰く。昆侖旁薄とは、貞を思ふなり」、天は昆侖と地を包み、狂うことなく一日に一度めぐる。地は旁薄と中に居り、太陽を地下に隠して外に出さない。賢人は、天地と同じように、萬物のために思慮を働かせ、この上もなく憂いかつ樂しむ。

「次二。神、玄に戦う。其れ陰陽を陳ねる」「測に曰く。神、玄に戦うとは、善惡并せんとするなり」、陽(正・善)と陰(邪・惡)とが互いに併合しようと、内に戦う。小人の心(二・火)は純粹でないため、善惡を心中に争わせてみなければ、善を辨別することはできない。

「次三。龍、中に出ず。首尾信に以て庸と爲すべし」「測に曰く。龍、中に出ずとは、其の造るを見わすなり」、春陽の氣である蒼龍(三・木)が支配して、萬物始めて出、萬物一生の資質が定まる。君子は徳を修め、適時に出て、大いに伸長する。

「次四、庫く虚こしく困こる無し。大いに性命を受ければ否いながる」「測はかに曰いく。庫虚の否とは、大受する能わざるなり」、陰氣（四金）は、陽の唱導を待つて自らを機能させるといふことがない。また小人も謙虚に公論に従うことができぬ。それ故高位を得れば危険である。

「次五、日、天に正し。其の辰を以て主と作るに利し」「測はかに曰いく。日、天に正しとは、位に當るを貴ぶなり」、太陽（五・土）は、正午（中）に一番明るい。君子が適所に居つて政治を行なえば、天下を濟うことが出来る。

「次六、月その博ひろを闕ひらく。西に明を開くに如かず」「測はかに曰いく。月その博を闕くとは、明始めて退くなり」、十六日（中）に、月（六・水）は缺け始める。小人が全盛を謳歌するの時、極まれば變じて、すでに政は衰落し始めている。

「次七、魯ろ魯大いに魁かし傾かう。水のごとく貞を包とる」「測はかに曰いく。魯魯の包とは、臣則（收斂）に任せるなり」。成就した物を、水が包取するようにつかり藏し養い、來年の成長（貞）を待つ。君子も寛裕に仁義で民衆を治め安らかにする。

「次八、黃、黃ならず。秋常を覆くえず」「測はかに曰いく。黃、黃ならずとは、中の徳を失するなり」、八は七九の中央で秋の象がある。しかるに夜に當るため、秋の收斂の徳がない。そして小人は刑罰の適正を失する。

「上九、靈を顯くえず。氣形反かる」「測はかに曰いく。顯靈の反とは、時に克たざるなり」、極まれはくつがえる。君子は時政を極めるも、常に將來の衰落を恐れる。

中首の九贊は、中の範疇で機能している。初一「中に幽み」、次二「女（中）に戦い」、次三「中に出」、次四「中に囚らず」、次五「正午（中）

に正しく」、次六「十六日（中）に闕け」、次七「中に包み」、次八「黃中ならず」、上九「中より反える」。まさに『女（中）都序』に「贊は群綱を上げ、乃ち名に綜とぶ」といふ通りである。

しかも贊辭は下、中、中の位置によって基本的様相をかえる。中首初一の「思」、次三での「見」、次五での「貴」、次七での「任」、上九での「不克」なる表現は、『玄圖』の「故に」一に思心し、二に反復し、三に成意す。四に暢ちやうを條じょうし、五に著明となり、六に極大となる。七に敗損し、八に剝落し、九に殄絶すの記載と完全に對應する。そしてこの一から九までの記載は、基本的な下、中、上の性格から派生している。『玄數』「逢うに下中上有り。下は思なり。中は福なり。上は禍なり。思福禍各の下中上有り」のように、下という物事の未だあらわれざる時には「事を思い」、中という全盛時期には「福を生じ」、上という衰落時期には「禍を生ず」。しかもそれが發達して九贊の位となれば、一の思内（思心）、二の思中（反復）、三の思外（成意）、四の福小（條暢）、五の福中（著明）、六の福大（極大）、七の禍生（敗損）、八の禍中（剝落）、九の禍極（殄絶）の如くなる。そしてこれら九種の上下關係によって贊辭の持つ基本的性格の一つが決定されるのである。

また贊辭は、晝夜によって基本的様相をかえる。中首の場合、奇數位が晝、偶數位が夜である。このような首を陽家の首と呼ぶ。また逆の場合が陰家の首である。そして『玄文』では、晝に相當する贊は君子について、夜に相當する贊は小人について考えている。また中首の贊辭を見ただけでも、奇數位は肯定的であり、偶數位は否定的だと感じられる。これこそ『玄數』の「晝夜を以て其の休咎を別つ」態度であり、太玄曆を規定する要因である。そして太玄占の中心ですらあ

	始	中	終
旦	陽	○	○
中	陰	○	○
夕	陽	○	×
夕	陰	×	○
中	陽	×	○
旦	陰	×	×

ただし

	始	中	終
旦	初1	次5	次7
中	次2	次6	上9
夕	次3	次4	次8

○=休  
×=咎

る。ここで太玄占のやり方を簡単に述べてみよう。三十六本の筮竹を使用し、「三」を決定し、この過程を四回繰り返し返して八十一首のいづれに當るかを決定する。そしてこの占筮が且に行なわれた場合、決定された首の初一、次五、次七の贊を使用し、眞晝、夜中の場合は、次二、次六、上九を、夕方の場合は、次三、次四、次八を使用する。これら贊が晝に當るか夜に當るかで、吉凶休咎を占うのである。つまり且筮が陽家の首に逢う場合、初一（晝）、次五（晝）、次七（晝）だから、始中終とも休で大休。中筮が陰家の首に逢う場合、次二（晝）、次六（晝）、上九（夜）だから、始中が休で終が咎となる。（圖を参照）このように晝夜は休咎の別れ目であり、しかも晝夜によって占斷がなされているのであるから、晝夜の決定こそ太玄占の中心部分である。これによって『太玄』に於ける贊の晝夜の重要性が理解されたと思う。

以上を整理してみる。七百二十九贊は「天」「地」「人」の三徳より形成された八十一首より、下中上なる序數によって生じてきた。そして九贊の展開は、八十一首の名稱によって規定されていた。つまり減首だったなら、「減」ということが始めより發達して行き、極點まで到達する九種の位相を考えることによって、九贊の辭は生じてきたのである。また贊辭を決定する要因に、贊の相當する晝夜がある。そし

て七百二十九贊はまったく晝夜によって休咎を決定されるのであるから、晝夜こそ太玄占の中心である。

2

七百二十九贊が占筮のため作られたのは、贊辭を見るまでもなく明白である。そして晝夜こそ休咎の別れ目だという認識のもとでは、晝夜は天體の運動によって決定されるのであるから、一年の長さと同様に贊とは對應させなければならなかった。それ故各首九贊という構成が生じてくる。だが一首九贊の意味は、ただそれだけではない。それは、下（始）、中、上（終）つまり時の様相によって贊辭を表現することにあらわれるように、揚雄が一生をかけて培ってきた「時に因循する」という處世觀すなわち因時思想（池田秀三氏『法言の思想』日本中國による）の體系でもあった。つまり占筮とあるいは軌を一にする「時に因循する」という態度の表現なのである。占筮とは未來に於ける「世のなりゆき」あるいは「機會」という意味の時命を知るためのものであるから、「時（命）に因循する」という態度と根本的には一致し、それ故一首九贊に始中終の位相に於ける状況を表現する姿勢が生じてきたのである。

このことを明確にするため、先ず『解嘲』を見てみよう。揚雄が『太玄』を草じた時、或る人譏って「上世では、士とは衆人の綱紀であった。それ故自ずと高位高官に上ることができた。しかるに雄は綱紀となることはできず、さりとて政治に有益な事もできず、下位の官に甘んじている。それ故『太玄』は價値のないものである」という。これに對し揚雄は反論する。「戦國の世では、士を得る國は榮え、士を失すれば衰んだ。故に士を請い師を迎えて、孟軻のようにもも萬乗の師となることができた。しかるに漢の太平の世では、凡庸の夫でも充分國を守ることができ恵いなどまったくない。そのため人と

違つた事を言へば疑われ、行を異にすれば罪せられる。このように時が違えば行爲も變つてくる。(第一段) また聞く所では『火は炎炎と燃るも、極まれば大地がその熱を藏め、雷も隆隆と聲を發するも、極まれば天がその聲を收める』という。盛を極めればついには滅亡するため、位の極高なる者は宗危く、自ら守る者は身を全うす。それ故雄は玄を知り獸を知りて、清靜寂寞に道を守るのである。(第二段) そして歴代功を成した偉人賢人をみてみると、そこには『其の際に當る』、『其の時に遇う』、『其の適するに中る』、『其の所を得』、『其の宜に合う』ことがあつたため、才を盡すことができたことがわかる。『其の人に膽知あるといえども、亦た其の時の爲すべきに會えばなり。故に爲すべきの時に爲すべきを爲せば則ち従い、爲すべからざるの時に爲すべからざるを爲せば則ち凶なり』。雄は時に遇わなかつたので、ただ默然と『太玄』を守る。(第三段)

これによつて揚雄の因時思想が如何なるものか理解できたと思う。(一)時によつて人のとるべき行爲が變わり(第一段)、しかも(二)時とは「極まれば變ずる」ものである(第二段)。それ故(三)適(時)の來るを待つ(第二・三段)と結論している。そして(一)は『羽獵賦』に上古と他の時代との文飾の有無に言及して「各々亦た時に竝んで宜を得」たからだと述べていること、(二)は『長揚賦』に「故に意者以爲らく。事隆にして殺えざる罔し。物盛にして虧けざる靡し」とあること、(三)は『自序』「以爲らく。君子時を得らば則ち大行し、時を得ずんば則ち龍蛇」(『易』繫辭下「龍蛇の蟄するは以て身を存せんとなり」による)、にもあらわれている。まさに揚雄が一生をかけて培ってきた考えなのである。しかも『太玄』は『易』に擬らえ、字句までも模倣して作られたものである。それ故今の二重の意味に於て『易』の「潛龍」

の思想すなわち因時思想が『太玄』にあらわれないはずがない。

しかも(一)時は「極まれば變ずる」のであるから、(二)時によつて世相が變わり、また(三)時を待つという態度も生じてくる。それ故、先に整理した因時思想の三段階は、最終的には(一)「極まれば變ずる」という時の性格即ち變化相に總括することができる。そしてこの變化相に對する言及は『玄堂』に存する。「夫れ道に因有り循有り。革有り化有り。因りてこれに循えば、道とこれを神にし、革りてこれを化せば、時とこれを宜とする。故に因りて能く革われれば、天道乃ち得、革わりて能く因れば、天道乃ち馴う。夫れ物因らざれば生ぜず。革わらざれば成らず。故に因を知りて革を知らざれば、物その則を失し、革を知りて因を知らざれば、物その均を失す。革の時にあらざれば、物その基を失し、因の理にあらざれば、物その紀を喪う。道とは『太玄』の道に他ならないのだから、『太玄』には變化相としての時、恒常相としての理の二種の言及があると結論できる。そしてそれは先の因時思想が『太玄』に基本的なものとして存在しなければならぬという結論とも一致する。しかも恒常相は八十一首で充分考えられていた。そして七百二十九贊は占筮であることより、變化相に注目したものであることは明白である。

そして實際、九贊は下中上なる序數關係つまり變化相の關係によつて決定付けられていた。もちろん始中終なる變化相としての時間的前後關係としてもとらえられていた。『玄告』「天、三據にして成る。故にこれを始中終という。地、三據にして形る。故にこれを下中上という。人、三據にして著る。故にこれを思福禍という」そしてここで問題にしている意味での時すなわち「時に遇う遇わない」としての時も、思福禍という形で表現されている。つまり、九贊は事の未だ顯現

しない「始」・「下」より發達して行き、極點「終」・「上」まで到達する九種の位相により生ずる。これは「極まれば變ずる」という思想を表現する。そして同様に人間界での「事を思う」（修業時期）、「福有り」（全盛時期）、「禍を生ず」（衰落時期）なる顯現状況を説明する。これは時命の「極まれば變ずる」という理念を表現する。このように「極まれば變ずる」という變化相の記述により九贊は生じているのだから、一首九贊は因時思想という變化相に意識を置いた考えより生じてきたと結論できる。すなわち占筮と同位相の變化相による因時思想のため、七百二十九贊は生じてきたのである。

#### まとめ

『太玄』は、思想を異にする二種の系列によって構成されている。一は八十一首にあらわれた恒常相であり、一は七百二十九贊にあらわれた變化相である。

八十一首は、玄↓三方↓九州↓二十七部↓八十一家と三進法的に生成され、しかも陰陽二氣で位置付けされている。三進法的秩序は、原理的に「人」が「天」「地」と並列であること、すなわち五經の人倫を重大視する意識から要請されたものであり、また陰陽消息説は、「人」が「天」「地」に順わねばならぬこと、すなわち「則天」こそが『太玄』の中心命題であることに由来する。まさに道あるいは理といえる恒常相の表現である。

これに對し七百二十九贊は、一首九贊の例によって八十一首より生じてくる。そして下(始)、中、上(終)という位置・時間による變化相にスポットをあて、時とは「極まれば變ずる」もの、それ故時に因循したがわねばならないと結論する。また變化相の世を渡る指針には占筮があ

るから、變化相を占筮の理念によって説く。そして占筮の必要のため、吉・休を晝、凶・咎を夜に對應させ、兩贊一日の例を築きあげる。これが七百二十九贊の變化相の思想である。

そして八十一首の三進法的陰陽消息説と、七百二十九贊の因時思想として表現された太玄占とを、緊密に結合するものとして太玄曆が存在する。すなわち陰陽消息説から「冬至が基準・開始である」という原則を、また七百二十九贊の太玄占より「一贊を晝、一贊を夜に配當し、兩贊で一日とする」という原則を抜き出し、當時の曆、太初曆を使用して、特殊な太玄曆を構築したのである。太玄曆は、まったく異質の二系列の各々の中心命題を結合して生じてきたものであるから、相反する二系列の結合者あるいは結合媒介者なのである。

逆に言えば、「天に順う」という中心理念のため、天を正確に説明する曆構造によって「天」「地」「人」の道を説こうとする基本態度が生じてくる。そして天の二重の性格、恒常相としての陰陽消息、變化相としての時命を説明しようとして、一方を八十一首、一方を七百二十九贊として表現する。八十一首は恒常相のため、天の理念、陰陽消息説となり、七百二十九贊は變化相のため、常ならざる天の運動を説明するものとなる。また八十一首は恒常相のため、五經・三統の道と結びつけられ、七百二十九贊は變化相のため、占筮の術と結びつけられる。それ故曆構造は二重となり、一方は陰陽消息を説く時候曆に、一方は天の運動を説く數值的な曆に對應させられ、また數值的な曆の二本柱に各々の基本理念が使用されることとなる。そして曆という構造のため、否應無しに當時の曆太初曆によっても制約を受けた。以上が『太玄』の構造的意味である。曆が構造を決定する中心要因となつていたのである。

注(1) 本論文を草するにあたり、本田清氏『易學—成立と展開』、鈴木由次郎氏『太玄易の研究』を参考にした點が多い。

(2) 揚雄は十九年七閏法を知っていた。『玄告』「歲寧而年病。十九年七閏。天之償也」

(3) 蘇洵の論旨は「踳贊・贏贊を削れ」であり、このことをはつきり理解しているわけではない。

(4) 顛頤曆とは如何なる曆であったかを知る明白な資料は残っていない。ただしよく知られている秦・漢初に使用された顛頤曆は十月を一年の開始月としている。ところが別に曆元を異にする顛頤曆も存した。そしてこの一年の開始月はわかっていない(汪曰楨『古今推歩諸術考』参照)。さらに漢代では、秦の顛頤曆は、五行の水→冬→十月なる對應で十月を一年の開始月としたと考えられていた(實際はそのようにして作られたのではない)のであるから、水→冬→十一月の對應の方が自然ですらあるので、「秦は曆術に不明であり、本當の顛頤曆は十一月冬至を開始月としていた」と爲されていたとしても何等不自然さはない。しかも漢代實際に「秦は曆術に不明であった」と考えられていたから、ますますこの考え方に妥當性があることになる。

(5) この考え方の正當性は踳贊・贏贊の名稱によっても主張できる。踳の意味が「不足」であり、贏の意味が「餘有り」であることを考えると、踳贊で終る 365 日は  $\frac{365}{2}$  日不足しており、贏贊で終る 365 1 日は  $\frac{769}{2}$  日餘有るのであるから、この曆記述とびつたり對應する。

(6) 三進法であるのはそれ自體明白なのであるが『玄數』「家一、一を置く。二、二を置く。三、三を置く。部一、増す勿れ。二、三を増す。三、六を増す。州一、増す勿れ。二、九を増す。三、十八を増す。方一、増す勿れ。二、二十七を増す。三、五十四を増す」のように、三進法の計算まで記しているのである。この計算は、中首を一とした場合、各首は第何番目に當るかを求めたものであり、家を(30)の位、部を(31)

の位、州を九(3<sup>2</sup>)の位、方を二十七(3<sup>3</sup>)の位とし、(一)を0、(二)を1、(三)を2と對應させ、それに數學的に普通の三進法では0より始まるのに、この場合1より始まることにより、1を加えた形になっている。

例 ䷗ 賈首(17)  $17 = 0 \times 3^3 + 1 \times 3^2 + 2 \times 3^1 + 1 \times 3^0 + 1$   
 (0121) 「方一、増す勿れ」 「部三、六を増す」  
 「州二、九を増す」 「家二、二を置く」